高尾山古墳の概要について

<資料目次>

1. 高尾山古墳の立地と発見・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
2. 高尾山古墳の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
3. 高尾山古墳の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6
4. 高尾山古墳の重要性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

1.高尾山古墳の立地と発見

■高尾山古墳の立地

高尾山古墳は、愛鷹山南麓に放射状に広がる尾根の末端、標高約20mの場所に築造されています。墳丘上に立つと、今は沼津の市街地となっている平野が眼下に広がり、さらに南に駿河湾を遠望することができます。かつて田子の浦を湾口として奥駿河湾に形成された「浮島湖」は　、この頃には淡水化が進んで浮島沼となっていました。しかしアシやヨシを縫うように進めば古墳の南西2～3kmの地点までは、舟で到達することができたと考えられます。

■高尾山穂見神社と高尾山古墳の発見

かつて高尾山古墳の後方部上には高尾山穂見神社が、前方部には熊野神社が鎮座していました。

熊野神社がいつこの地に遷座したのか、詳しいことはわかっていません。一方、高尾山穂見神社は江戸末期の弘化3年（1846）に、山梨県櫛形町（現南アルプス市）の高尾穂見神社から分祀したのが始まりと伝えられています。

地元には古くからこの高まりが古墳ではないかと考える人もいましたが、はっきりとしたことはわかりませんでした。

昭和53年に地元の考古学者が、古墳であることを初めて指摘しました。これを受けて、**昭和57年に発行された『沼津市文化財分布地図』において、高尾山古墳は初めて遺跡として登録されました。**

しかし、遺物がまったく発見されなかったうえ、墳丘の一部が崩されてしまっていたため、その時期や形は不明なままでした。

古墳時代初期～古墳時代前期（3世紀前半ないし中頃～4世紀初め）の古墳分布

これらの古墳の築造時期は、高尾山古墳が最も古く古墳時代初期（西暦230年～250年）、他のものは古墳時代前期（3世紀前半～4世紀初め）と推定されています。

2.高尾山古墳の概要（大きさと形）

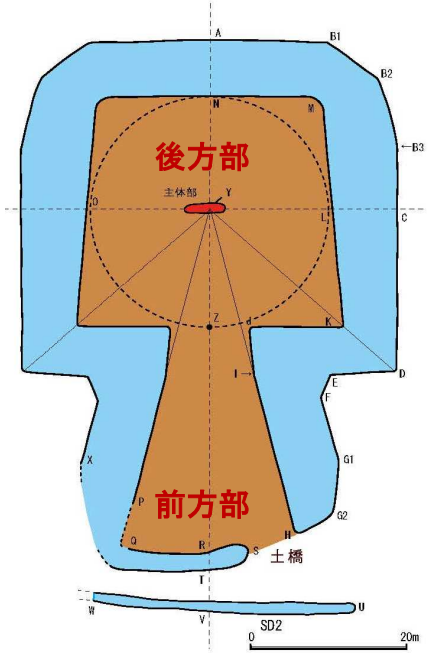
■古墳の形状：前方後方墳

高尾山古墳は、方形と方形（台形）をつなぎ合わせた形をしていることから、「前方後方墳」と呼ばれています。この形は古墳時代の比較的古い頃に多く造られ、主に東海地方から東に分布します。

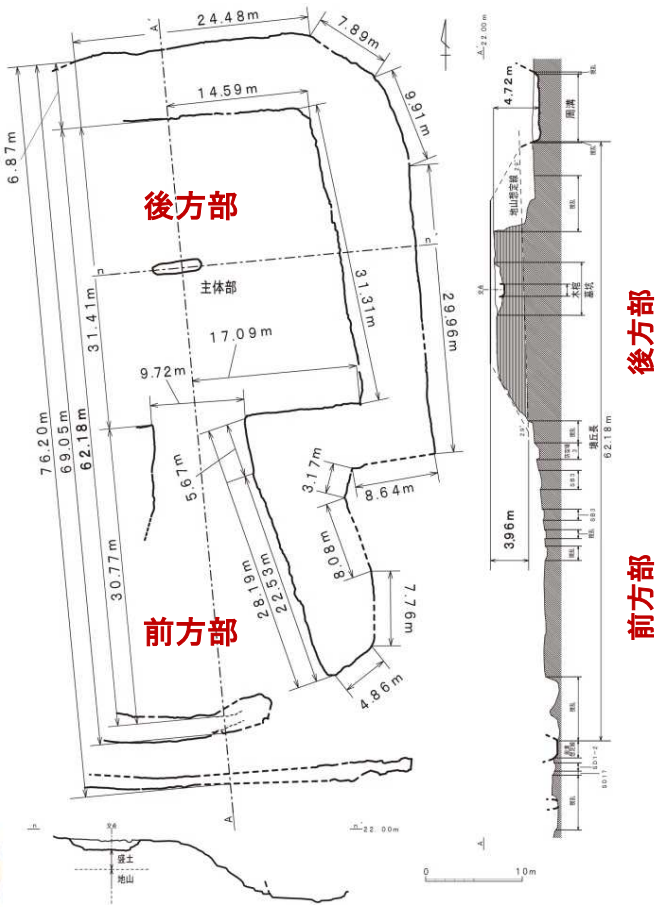
沼津では高尾山古墳が唯一の例です。

■古墳の規模

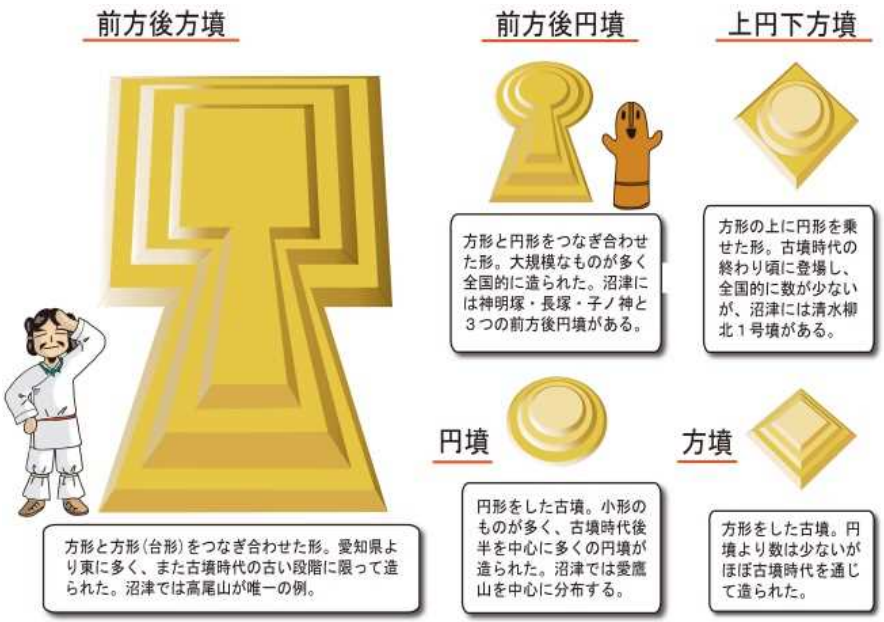
全　長：約62.2m（前方部：約30.8m　後方部：約31.4m）
最大幅：約34m　　周溝幅：8～9m（南端は2m前後）
墳丘高：後方部：5m　前方部：1m?



高尾山古墳の平面形状



高尾山古墳の規模



古墳の形と種類

高尾山古墳を南東側から俯瞰したイメージ
（高さを強調して表現）

2.高尾山古墳の概要（構造と構築方法）

■古墳の構造

・墳丘構造

いったん古墳の周囲を広く平坦に削平し、その上に5m近い高さまで土を盛って後方部を造っています。後方部には、少しずつ土を積んでは突き固めていく**「版築技法」**が採用されています。

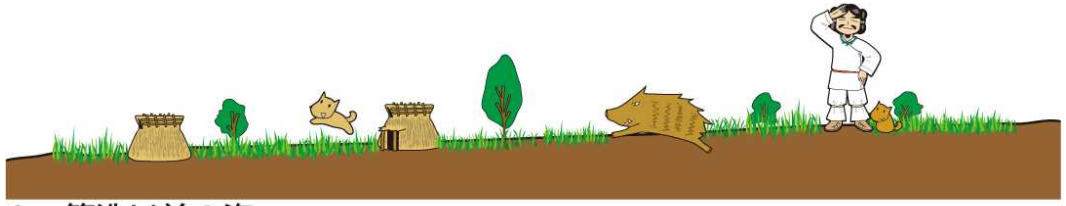
前方部は熊野神社などによって削られている部分が多いため、盛り土の正確な高さはわかりませんが、後方部よりかなり低かったと考えられています。

・設計規格

後方部の主体部が全ての起点となっており、緻密な設計規格の存在が伺えます。

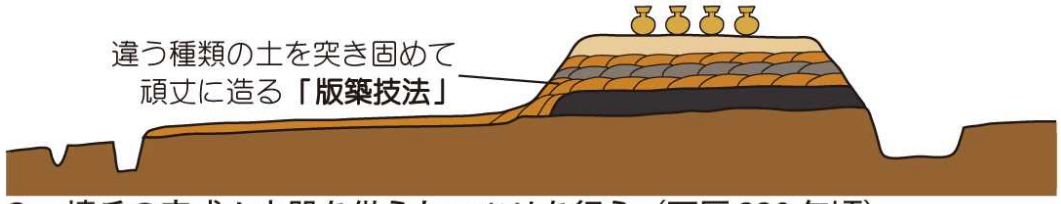
・周溝

墳丘を周溝が囲っています。ただし、南東部には意図的に掘り残された「土橋」が存在し、埋葬施設へ続く墓道の入り口となっています。

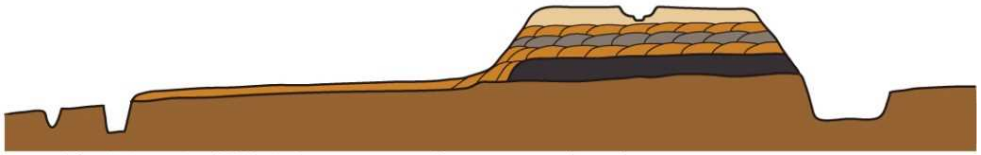


1．築造以前の姿

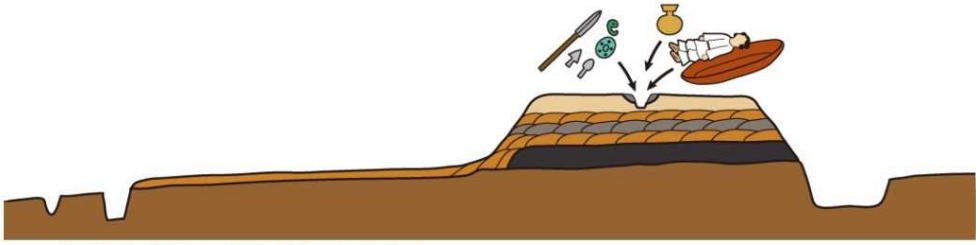
2．周溝を掘って、その土を後方部に積み上げる



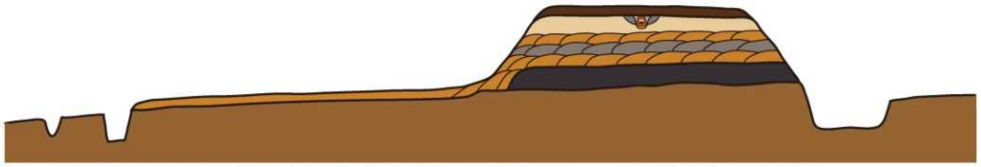
3．墳丘の完成！土器を供えたマツリを行う（西暦 230 年頃）



4．墳丘上から墓坑を掘り込む（西暦 250 年頃）



5．埋葬を行う（西暦 250 年頃）



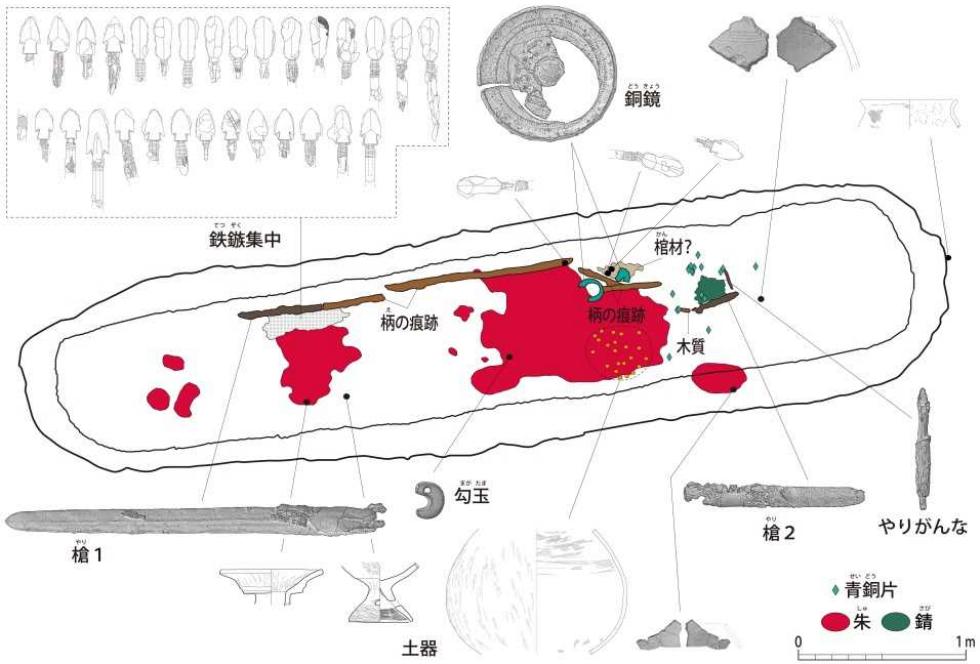
6．墓坑を含めた墳丘全体をさらに土で覆い、埋葬行為が完了

2.高尾山古墳の概要（埋葬施設と副葬品、出土した土器）

■埋葬施設

墳丘上に掘り込んだ舟形の墓坑に、木の棺を直接埋める「木棺直葬」と呼ばれる埋葬方式で、石室はありません。木質部は腐朽してほとんど残っていませんでした。

・木棺の形状： 舟形木棺（平面形が舟形）
・木棺の規模：長軸（東西）約5.1m × 最大幅約1.3m
・木棺の底面に朱（水銀朱）を敷く



副葬品の出土状況

■副葬品

鏡を除いた副葬品では、装身具は勾玉１点のみで、その他は鉄製の武器及び工具となっています。

【副葬品の種類】
青銅鏡（獣帯鏡、後漢製） １面
※埋葬時に意図的に割られています。
勾玉１点、鉄槍２点、ヤリガンナ１点
鉄鏃32点

主体部遺物出土状況（青銅鏡）

■出土した土器

・出土土器の様相

墳頂部をはじめ墳丘盛土および周溝から多数の土器が出土しました。
これらの中には地元の土器（大廓式）だけでなく、北陸系、近江系、東海西部系といった外来系土器が一定量含まれます。なお、畿内系の土器は出土していません。

・出土土器が示す時期

出土した土器は、場所によって時期差があり、これは古墳築造、埋葬、祭祀儀礼などが行われた時期の違いを示しているものと考えられます。
墳頂部：230年頃と250年頃の土器が出土→築造時期及び埋葬時期
墳丘盛土：230年頃の土器に限定→墳丘築造時期
周溝内：230年頃から250年以降のものまで→祭祀儀礼が行われた時期

周溝北東部での土器出土状況

2.高尾山古墳の概要（築造時期とその時代）

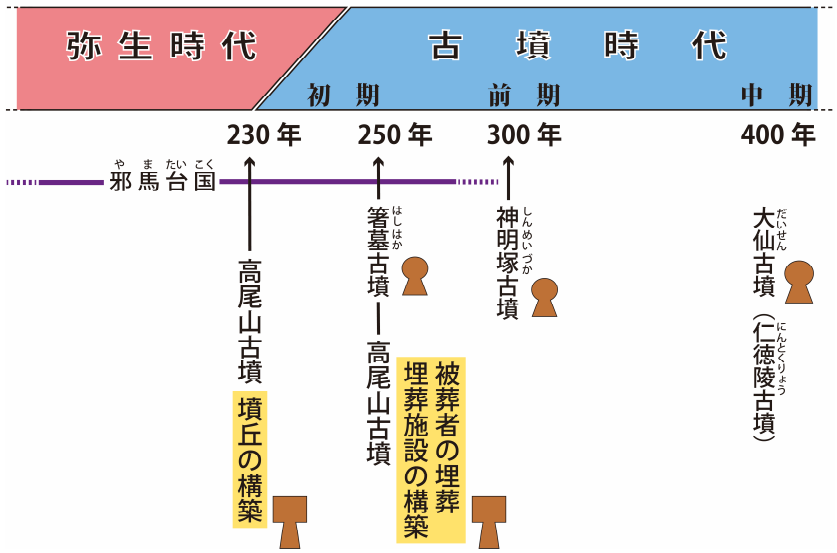
■高尾山古墳の築造時期

・古墳の築造は西暦230年頃、埋葬は250年頃

平成26年度の追加試掘調査において、墳丘内部から出土した土器は、西暦230年頃のものに限られていました。また、主体部（埋葬施設）で出土した副葬品は250年頃のものです。この結果から、沼津市教育委員会では高尾山古墳は230年頃に築造され、250年頃に埋葬が行われたという見解に至りました。

・卑弥呼の墓とされる箸墓古墳よりも古い

卑弥呼の墓と推測されている箸墓古墳（奈良県桜井市）は、初めての定型的な古墳とされ、この古墳の成立をもって、古墳時代前期が始まるとされています。箸墓古墳は西暦250年頃に築造されたと考えられている（※1）ことから、高尾山古墳はこれよりも古い時期に造られたことになります。



弥生時代から古墳時代への移行と高尾山古墳の年代

■高尾山古墳が造られたのはどのような時代か？

・農耕社会の発展と争乱

弥生時代になって大陸から水田稲作が導入されると、水田の支配権と米をめぐり、集落間の争いが起きるようになりました。

・階級社会の成立

農耕社会の発展と争乱に伴って、支配者（勝者）と被支配者（敗者）の関係が生じ、階級社会が成立します。集落の政治的統合が進み、しだいに各地に国（小国）とそれを治める王が登場してきました。

・古墳時代への移行期

高尾山古墳が築造され、被葬者が埋葬されたと考えられる西暦230年～250年頃は、弥生時代から古墳時代に移行する時期に当たります。

・魏志倭人伝の記述

中国の史書『三国志　魏書　東夷伝　倭人条』（通称　魏志倭人伝）によれば、当時の日本（倭国）では、複数の小国同士の争い（倭国大乱）が生じ、争いは70～80年にわたって続いていたことが記されています。そして、この状況を抑えるために諸国が卑弥呼を共立して、倭国が一つにまとまったとされています。女王（卑弥呼）は、狗奴国の男王（卑弥呼古）と対立関係にありました。

※1　邪馬台国畿内説を唱える研究者の多くは、箸墓を卑弥呼の墓と考えています。
卑弥呼の死亡した年代は西暦250年頃で、近年の古墳研究では箸墓の構築年代も250年頃とする説が有力になりつつあります。

3.高尾山古墳の現状

■過去の削土と古墳の現状

・西側の市道

西側の市道は大正9年に旧金岡村で村道認定されています。それ以前は里道として存在していることから、古墳の西側はかなり前から削られていたようです。

・墳丘斜面に残る防空壕

太平洋戦争時には神社地に多くの防空壕が築かれていたようで、発掘調査の際にも3箇所で確認されています。また地元の方によると、市道擁壁側からも複数の防空壕が掘られたとのことです。

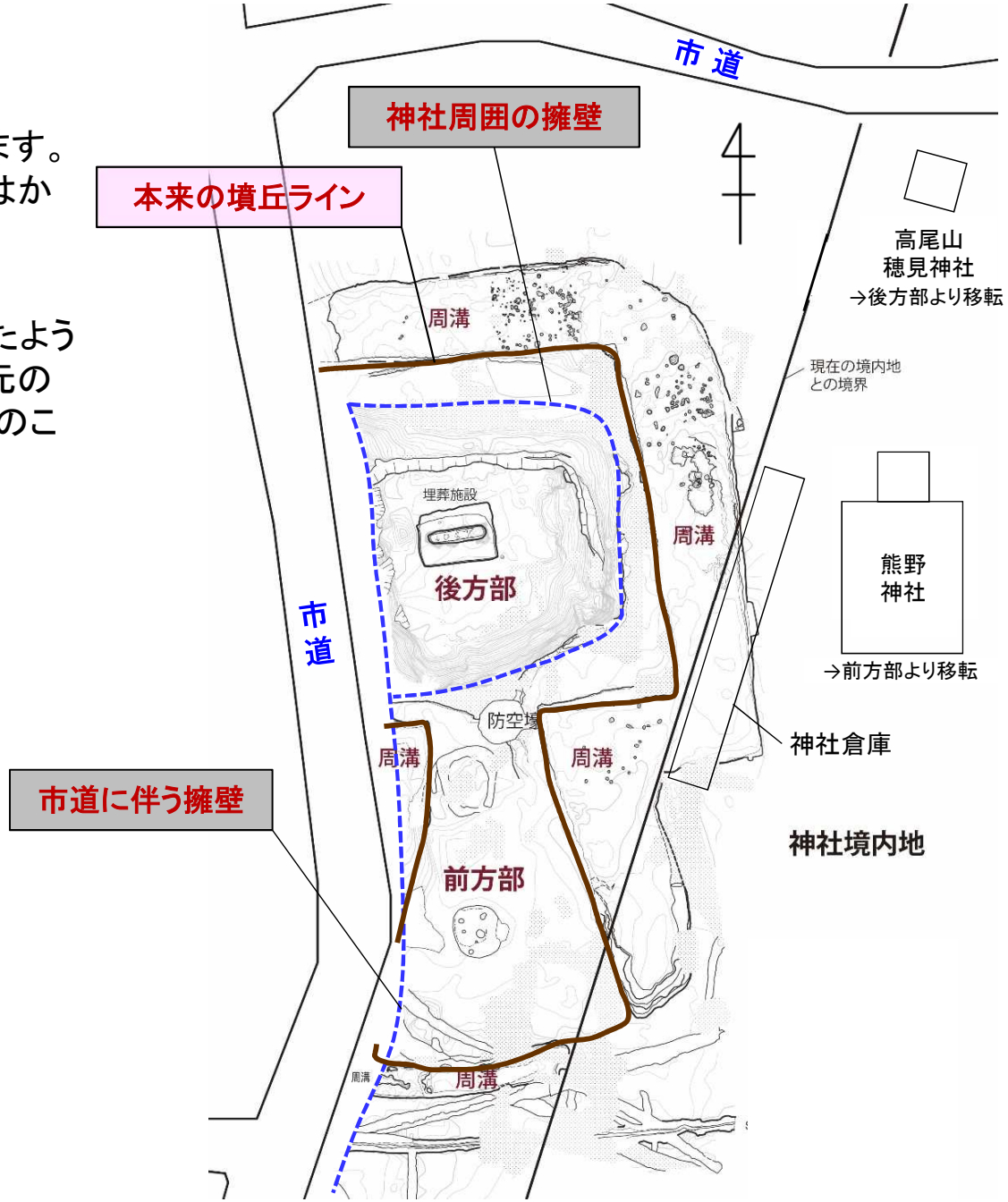
・墳丘の削平

昭和54年の西側市道の拡幅工事によって、墳丘部の一部が1.5～2mほど削られました。古墳西側と市道との境界にある擁壁は、このとき築かれたようです。

これと前後して後方部にあった高尾山穂見神社を取り囲むように擁壁が築かれ、それに伴って後方部は一回り小さくなってしまいました。

・現在の古墳の残存率

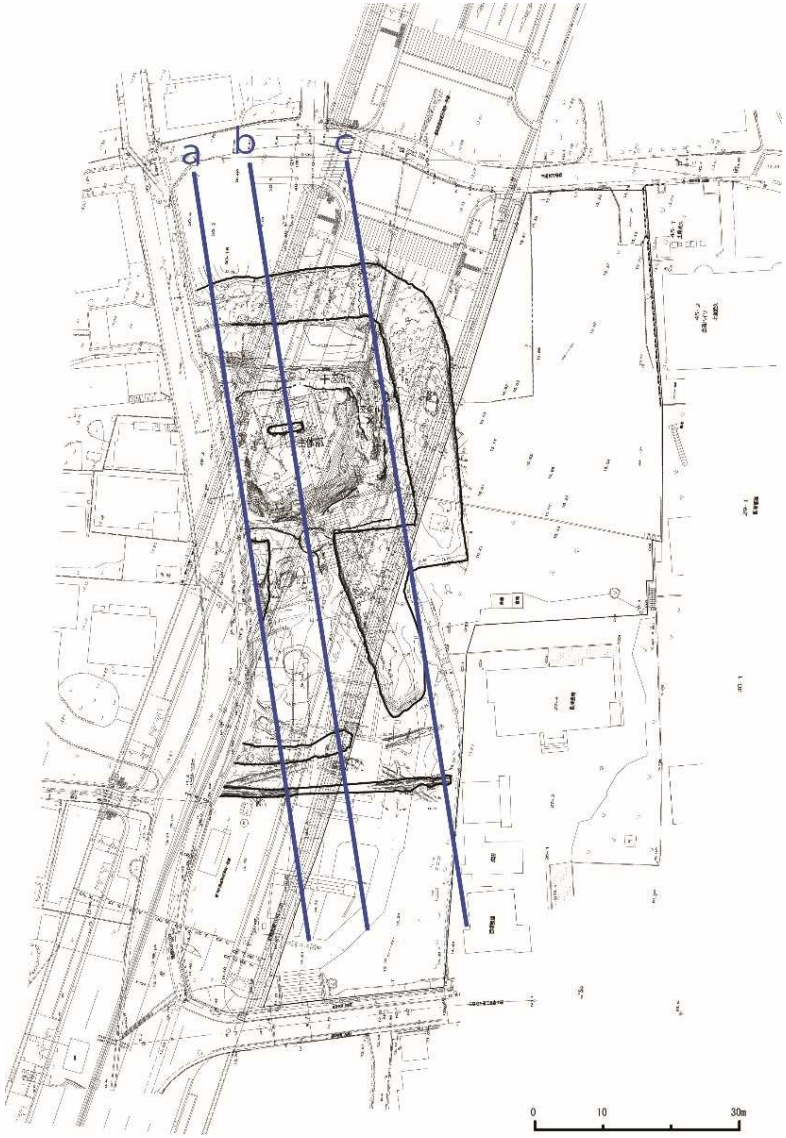
周溝を含めた古墳の全体面積は約3,030㎡ですが、西側の周溝と墳丘部の830㎡（全体の27%）が西側の市道によって削られており、古墳としての平面的な残存率は73%です。



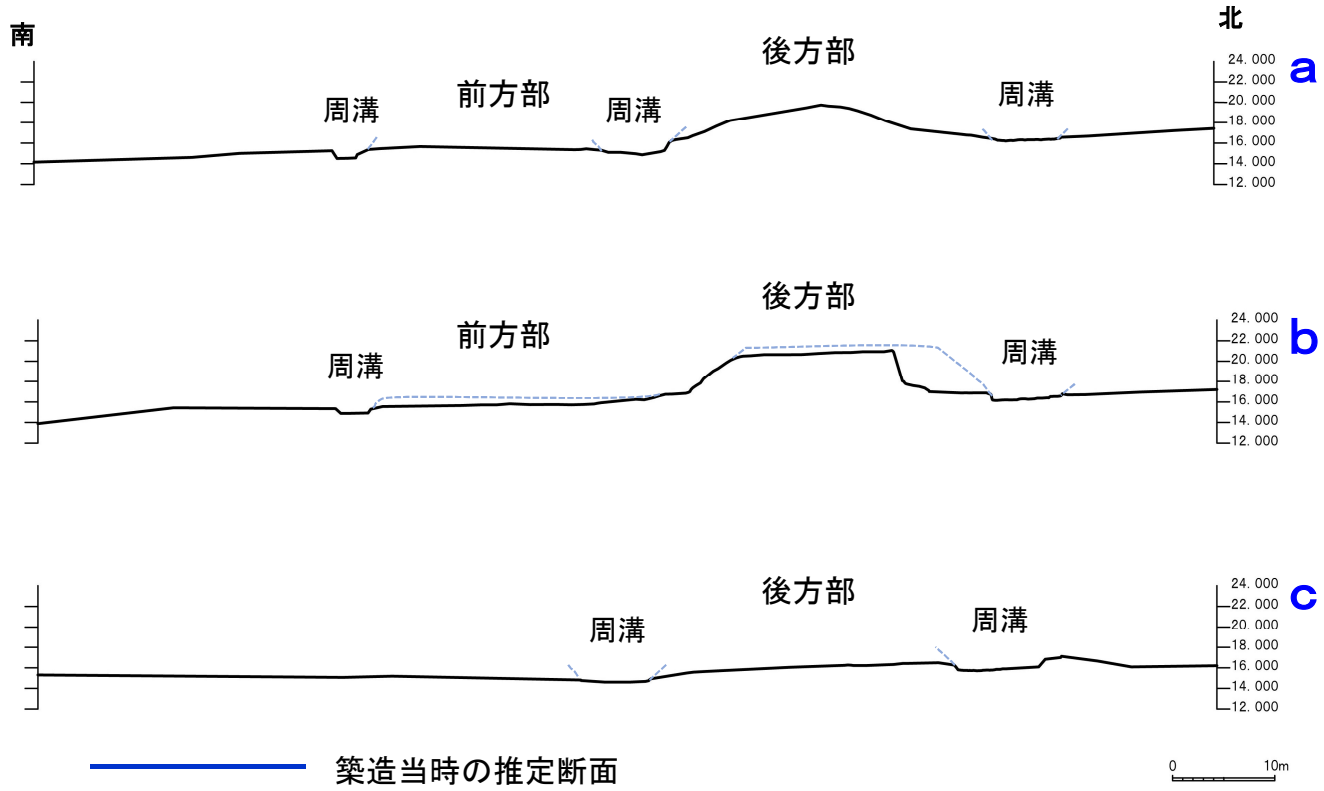
古墳の現状と残存状況

3.高尾山古墳の現状（墳丘断面から見た残存状況）

■墳丘断面からみた残存状況



・古墳主軸方向の墳丘断面



・墳丘の削平と残存状況

a断面は市道擁壁のすぐ内側（東側）を表現したもので、後方部が擁壁工事によって削られていることがわかります。

b断面は古墳の中心軸上の起伏を示していますが、後方部の北側が大きく削られていることがわかります。

4.高尾山古墳の重要性

■埋葬者のイメージ

・初めて東駿河一帯を支配した人物 「スルガの王」

高尾山古墳は駿河では最も古い古墳であり、その主は東駿河の大部分を支配していたという見方が大勢となっていることから、沼津市教育委員会では初代の**「スルガの王」**と紹介しています。

・高い経済力を有した人物

埋葬施設から出土した鏡（中国鏡）や高価な朱は、高尾山古墳の主の経済力の高さと交易範囲の広さを示しています。

・武人的性格の強い人物

副葬品のうち、装身具（アクセサリー）は勾玉のみで、槍、鉄鏃などの鉄製の武器が大半を占めていることから、埋葬者は武人的性格が強い人物と推定されます。

■高尾山古墳の歴史的評価

・東日本における古墳時代への独自な移行を示す。

これまで、地方における古墳の築造、つまり弥生時代から古墳時代への移行は、卑弥呼の墓という説がある箸墓古墳（※1）（奈良県桜井市）が築造されてから後のことと考えられてきました。しかし高尾山古墳は箸墓古墳より少し前に築造されており、畿内に統一的王権が成立する以前に、東日本においても独自に古墳時代へ移行しつつあったことを示しています。

・古墳時代初期の東日本における最古級かつ最大級の古墳

230年頃築造された高尾山古墳は東日本では最古級であり、初期古墳としては最大級の古墳です。同時期の東日本において全長60mを超えるような古墳は、長野県松本市にある弘法山古墳（国指定史跡）のみです。

・駿河の最初の政治的統合を示すモニュメント

「駿河」というと、いま多くの人は静岡市周辺をイメージしますが、かつては沼津周辺に中心地があり、それは駿河国から伊豆国が分国された頃（西暦680 年）まで続きました。高尾山古墳は、後に駿河国を形成することになるこの地域の、最初の政治的統合を示す重要なモニュメントです。

・畿内勢力と対立する勢力の存在を示唆

出土した土器の中には、山陰、近江、東海西部などから運ばれた土器が多く含まれていますが、近畿地方の土器はまったく出土しませんでした。これは高尾山古墳の主が、畿内勢力（邪馬台国？）と対立する勢力（狗奴国（くなこく））に与（くみ）していることを示す、という説を唱える一部の研究者もいます（※2）。

※1　邪馬台国畿内説を唱える研究者の多くは箸墓を卑弥呼の墓と考え、その築造年代を250年頃とみています。

※2　魏志倭人伝に記された狗奴国の位置については定まった見解はありませんが、その位置を東海西部に比定する研究者から提示されている見方です。